

## スタッフルーム

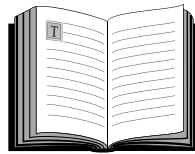
# 純粹なところ、いいね！

ちむら ちむら  
千村 文彦

(慶應義塾大学理工学メディアセンター)

大好きな映画のひとつに「ビューティフル・マインド」(2001年)がある。精神の病と闘いながらノーベル経済学賞を受賞した天才数学者ジョン・ナッシュの半生を描いている。病からくる奇行で居場所を失ったナッシュは友人を頼って母校のプリンストン大学に転がり込む。そこからどのように立ち直り再生するかという物語である。

映画の中では、プリンストン大学の単なる教授会というだけでもなさそうなコミュニティの存在が示唆されている。そのコミュニティは、最初のうちは眉をひそめつつも、人間の限らない可能性への信頼だけは失わず、ナッシュの学問の道を閉ざすことはしない。そして映画の終盤の心に残る場面で、ナッシュをコミュニティに受け入れることになる。それはむしろナッシュが心を開いた瞬間と言ったほうがよいのかもしれない。



かたや「ソーシャル・ネットワーク」(2010年)という映画がある。マーク・ザッカーバーグというITの天才が如何にfacebookを起業したかの物語である。ザッカーバーグは自分がユダヤ系であるがゆえに、ハーバード大学で連綿と続く、エリートのコミュニティに入れない。そのコミュニティへの対抗意識から、それもエリート連中以上に女性にもてたいというただその一心で、一大ソーシャル・ネットワークを築き上げる。

二本の映画はもちろん脚色である。きれいごとでは済まされないことが隠されていたり、誇張して描かれていることが大いにあるだろう。そもそもノーベル賞を取らなければナッシュはただの、キャンパスの困ったひとだし、facebookを発明しなければザッカーバーグは理屈では決して負かせられない、ただのいけ好かない学生である。しかし、そのような二人が奇跡を起こすのだから世の中は痛快で素敵で面白い。そして、一方の天才は大学コミュニティに拾われ助けられ、他方はそれへの対抗心から偉業を達成していることに注目すべきだろう。

facebookが依って立つインターネットはローカルなコミュニティどころか、大学ごと飲

み込もうとしている。検索エンジンは、感動の場面が実は作りごとであることを瞬時に暴き立てる。まるで「ビューティフル・マインド」を「ソーシャル・ネットワーク」が根こそぎ否定しようとしているかのようでもある。すべてが平板で突出のないインターネットの世界で大学はどのような意義を持つだろうか。

ひとりで突き抜けるのはますます難しい。そのような世界であるからこそ、拠り所となったり、ライバル心を燃やす対象となるような様々なコミュニティが重要な役割を果たすような気がしてならない。欧米では人種や宗教によって多様な人々がいて、自らを守るために様々なコミュニティを作ることがごく自然のことなのだろうか。学術研究の変わらぬ強さがそこにあるように思う。

ところで「ビューティフル・マインド」には図書館が登場する。居場所のないナッシュは日がな一日図書館で過ごすことになる。やがて彼の純粹な探究心を慕って学生が集まりだして、図書館で自発的なゼミを開くまでになる、という御伽噺。

大学のコミュニティは一朝一夕で作ることは難しいとしても、奇跡を起こすひとの可能性だけは信じていたい。ノーベル賞は御伽噺として見過ごしてしまうにはあまりにも惜しい。

追補：2012年のノーベル医学・生理学賞は、iPS細胞の研究により京都大学の山中伸弥教授に贈られた。あるテレビ番組で、山中教授がまだ無名のころに、国家プロジェクトの研究費を獲得するときの審査員をされた方のコメントが印象に残ったので記しておく。「研究の成果が出るとは100%信じていなかったが、このひとには何かをさせないといけなと感じさせるものがあつた。」